論文の内容の要旨

論文題目　逆接句を構成するコソの係り結びとその周辺

氏名　鴻野知暁

本論文の考察の対象の中心は、古代語のコソの係り結び、特に逆接句を形成するそれである。第１章にて本論文の目的と構成を述べた。研究の主な目的は、①「コソによる係り結びはいかなる意味の逆接を表し得るか（そして表さないか)」という逆接性の具体的様相を明らかにすること、②「なぜコソの係り結びは、他の係り結びと異なり逆接の意味となるのか」という、逆接が引き起こされる原理を、コソの性質から考察することの二つである。以上の話題と関連して、コソと対照的な性格を持つと見られるシの語性について論じる。さらに、逆接句を形成しない中古期のコソの用法の一つとして、文末に現れ、述語相当として働く「体言・連体形＋コソ」について述べる。

第２章では「コソによる係り結びはいかなる意味の逆接を表すか」という問題について論じた。この問題を考えるに当たり、逆接句一般の意味分類を体系的に考え、その中でコソの係り結びの逆接性を位置づけることとした。

はじめに日本語の逆接表現に関する主な先行研究を概観し、前件と後件の因果関係が希薄になると逆接と順接とが対応しないこと、そして、「因果関係に基づく推論」という論理的概念を分類の軸に据えると網羅されない用例が出てくることを指摘した。

本論文は逆接関係を「事態 P と Q とが『x において p であるが、y において q である』という対立関係を持つ」ものと規定する。そして「期待性」という心理的概念を元にし、逆接の意味を、言語主体の期待が否定される「意外的逆接」、言語主体が他者の期待を否定する「反発的逆接」、期待が関わらない「対比的逆接」に大きく三分類する。

上代においては接続表現があまり発達しておらず、確定の逆接句を表す形式としてはド・ドモが汎用的に使用されている。本論文は万葉集のド・ドモによる逆接句を調査し、上記の三分類をさらに細かく分けた。そして、各々の下位分類において、コソの係り結びがその逆接の意味を表す例が存在するか否かを調べた。意外的逆接は、言語主体がいかにして期待を抱いているかという観点から、①「論理的推論による期待」、②「言語主体の意思・希望・予想」、③「意思・希望・予想を伴う行為」という三つに細分類される。①は(a)「原因たる事実を元にして結果を推し量るが、現実事態によってその推し量りが否定される場合」と、(b)「結果たる事実を元にして原因を推し量るが、現実事態によってその推し量りが否定される場合」との二つに分かれる。このうち上代のコソの係り結びが逆接として示せるのは①(b)のみである。反発的逆接は、言語主体がいかにして他者の期待を否定するかという観点から、①「相手の短絡への非難」、②「通常とは異なる心情の表明」、③「障害への反抗的行為」の三つに細分類される。このうちコソの係り結びが逆接として示すのは①だけである。対比的逆接は期待性が介在せず、前件と後件が同等の比重で述べられるものである。この種の逆接は前件か後件のいずれかを強調するコソの係り結びによっては表すことができない。このように、逆接句一般の意味分類を詳細に行い、コソの係り結びがどの意味を表せるかについて明らかにした。

第３章では助詞コソの強調の性質がいかなるものか、そしてそれがいかにして逆接性につながるのかについて考えた。上代の已然形の単独用法が後句に続く場合、順接・逆接の両方が認められる。対して、「コソ～已然形」は振る舞いが異なり、後に句が続く場合は順接ではなく逆接となる。よってこの逆接性は、助詞のコソに固有の性質によってもたらされたものと考えられる。本論文は、コソ（特に逆接用法のそれ）の使用にあたっては、言語主体の内で、或る事物が基準として設けられていると考える。そして、コソが指す対象は、その基準とはかけ離れたもの、基準から逸脱するものとして区別される。つまり、ある基準から際だって異なるものとして扱う強調（特異的強調）の性質を、コソが有すると見るのである。逆接の係り結びで基準となるのは後続句に関係する。コソの係り結び部分がその基準とは別の、特異な事態として提示されるのだと考えられる。

そして、このコソの特異性がいかにして働くと「意外的逆接」および「反発的逆接」の

逆接性がもたらされるかを論じた。「意外的逆接」においては、係り結びの後続句で表される、結果たる事態から推論が出発する。原因たる事態がそこから推論され、基準となる。特異的強調のコソは、実際の原因事態を、この基準とは全く異なるものとして示す。言語主体が期待した原因が現実事態によって否定されるということが、意外性につながるのである。続いて、ド・ドモによる逆接句をコソの係り結びに置き換えることが可能かを考え、意外的逆接の下位分類のうち「結果から原因への推論」以外のものが、なぜコソの係り結びで表されないのかを説明した。「反発的逆接」においては、係り結びの後続句が話し手の中心的主張であり基準となっている。言語主体は、係り結び部分の内容を譲歩して一応認めるものの、コソの特異性によってそれを例外的事柄とし、中心的主張には無関係なものであると退けるのである。これは前章の細分類の「相手の短絡への非難」にあたる。「反発的逆接」のうち、「通常とは異なる心情の表明」と「障害への反抗的行為」の逆接句は、意味的に、無関係で退けるべき事柄を表すわけではない。よってこれらの用法ではコソが使われる余地はないのである。

第４章は、コソと対照的であると見られる助詞シの性質についてである。助詞のシはこれまでの研究では休め辞などと言われ、語調を整えるくらいのものと見なされていた。しかし、シは現代の間投助詞ネ・ヨ・サなどと異なり、どこにでも自由に生起するわけではない。上代では、その４割強が「…シ…ナラバ」、「…シ…ナレバ」と条件句の内部において使われ、単文では「形容詞」、「…ユ」、「…ラシ」が述語に来ることが多い。本論文はシの語性を、一つの対象を重大なこととして受けとめ、専らそのものに目を向けるものと考える。シは、その一方で、他の事物を、どうでもいい、取るに足らないものとして扱う。シの持つ性質とは「そのものへの重大視、他への等閑視」と見られるのである。本章ではかかるシの性質が、シが多用される上述の環境で一貫して認められることを示す。

形容詞文中のシは、言語主体の情意が専ら其の対象に収斂するということを表すことが多く、また、「…シ…ユ」は言語主体の関心が自然と一つの対象に収斂することを表す。ここに対象への重大視を認めることができる。「ラシ」については大鹿薫久氏の本体把握の説を援用した。シは原因である「元」の事態の方を標示するのであるが、それは言語主体が眼前の事態よりむしろ元の事態へ関心があり、だからこそ元の事態がシによって強調されるのだと考えられる。続いて条件句中のシの用法について、８種類の特徴的な構文パターンが観察されることを指摘し、それぞれのパターンで、一つの条件を重大なものとみなし、他の条件は帰結に影響しないと等閑視するシの性質を確かめた。これまでのまとめとして、なぜコソが逆接に、シが順接に、それぞれ関わるのかについて、各々の助詞の持つ性質か

ら論じシとコソの対照性を示した。

第５章では連体形や体言に後接し、そこで文が終止するというコソの文末用法（N+コソ）について考察した。中古和文資料を調査した結果、当用法は 10C 末頃から認められること、『うつほ物語』では後編に分布が偏ること、和歌には使われず口語的性格が強いことの三点が判明した。続いて当該用法の異文を調べ、異文の生じた時代では、「N+コソ」が文の述語相当として理解されていたということを見た。

中古期になるとコソが「ニコソアレ」のように述語位置に多く現れるようになることから、本論文は「N+コソ」の用法を、「N+ニコソアレ」表現の定着を下地として、①アレの省略、②ニの脱落という二つの変化によって生じたものであると考えた。続いて、逆接で後に続かずに単純な強調となるコソの係り結びの発生および増大について、基準となる事物に主眼が置かれなくなったこと、係り句―結び句の対立が弱化しコソが漠然と文全体を強めるようになったということから説明を行った。本章で扱った用法は、時代が下るとともにコソの逆接性が失われていったことの結果の一つと見なすことができる。

本論文は、コソの係り結びが「結果から原因への推論に関わる意外的逆接」および「相手の短絡への非難を示す反発的逆接」を表すということを指摘した。そして、その逆接性が特異的強調の助詞コソによってもたらされる原理について述べた。また、「そのものへの重大視、他への等閑視」という性質を持つ助詞シを併せて論じ、コソの強調性と比較・対照した。さらに、中古以降の文末用法の発生を指摘し、コソの生起位置の史的変化と逆接性の喪失とをそこに見た。